

千葉県八千代市
市内出土人骨分析委託報告書Ⅱ

神野芝山 2 号墳

沖塚古墳

逆水西遺跡（逆水遺跡 a 地点）

2003.3

八千代市教育委員会

凡 例

- 1．本書は、千葉県八千代市内の遺跡から出土した人骨の分析結果をまとめたもので、同趣旨の報告書としては2冊目である。
- 2．本書に掲載した人骨の分析は、平成12年度及び平成13年度の八千代市の文化財保護事業の一環として、12年度は橋本裕子氏（総合研究大学院大学文化科学研究科）に、13年度は梶ヶ山真里氏（国立科学博物館人類研究部）に委託して実施したものである。
- 3．本書に掲載した遺跡の発掘調査の所在地等は、次のとおりである。

遺跡	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
68	かのしばやま 神野芝山2号墳	神野字芝山976 - 2外	S.47.5.5 ~ 5.28	-	学術調査
265	おき づか 沖塚古墳	村上字沖塚前2287 - 22	S.63.9.26 ~ H.1.1.31	1,600m ²	宅地造成
100	さかさみずにし 逆水西遺跡 (逆水遺跡 a 地点)	米本字逆水1317	H.8.4.1 ~ 5.1	678m ²	墓地造成

- 4．神野芝山2号墳及び沖塚古墳は梶ヶ山真里氏に、逆水西遺跡は橋本裕子氏に委託した。
- 5．逆水西遺跡は、平成9年に逆水遺跡に統合された。逆水・旧逆水西両遺跡の範囲内で、最も早く調査されたのが本地点なので、「逆水遺跡 a 地点」となる。しかし、確認調査の報告書（八千代市教育委員会1996）で既に「逆水西遺跡」の名が使用されているので、今回は括弧書きで併記することとした。なおこのため、八千代市教育委員会（1997）に掲載した逆水遺跡はb地点となる。
- 6．上記各調査の発掘調査報告書は、いずれも未刊行である。本文中に各調査について概要を記したが、人骨分析以外の部分の詳細については、正式な報告書に掲載する予定である。
- 7．本書の執筆は、の1・2を梶ヶ山真里氏・馬場悠男氏（国立科学博物館人類研究部）が、の3を橋本裕子氏・馬場悠男氏が行い、の3を宮沢久史（八千代市教育委員会生涯学習課）が、その他及び編集を常松成人（同）が行った。

本文目次

凡例

各遺跡の概要

1 神野芝山2号墳.....	3
2 沖塚古墳.....	6
3 逆水西遺跡(逆水遺跡a地点).....	8

人骨の分析

1 神野芝山2号墳出土人骨.....	10
2 沖塚古墳出土人骨.....	21
3 逆水西遺跡(逆水遺跡a地点)出土人骨.....	27
まとめ.....	29

挿図目次

第1図 八千代市と掲載遺跡の位置.....	2
第2図 神野芝山2号墳と逆水西遺跡周辺の旧地形.....	3
第3図 神野芝山2号墳と逆水西遺跡の位置... 3	
第4図 神野芝山2号墳石棺内の区分図と石棺の写真... 4	

第5図 沖塚古墳周辺の旧地形.....	6
第6図 沖塚古墳の位置.....	6
第7図 逆水西遺跡6P・8P実測図.....	9

写真目次

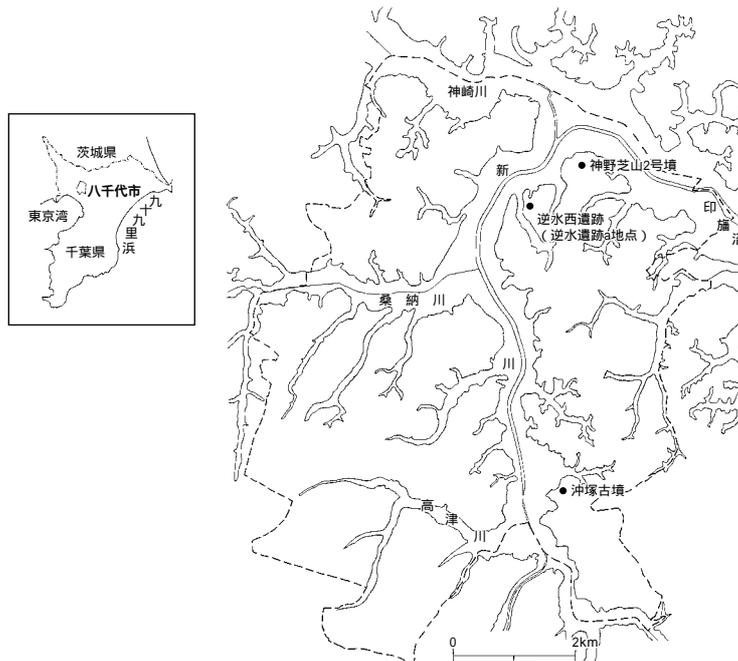
写真1 神野芝山2号墳.....	5
写真2 沖塚古墳.....	7
写真3 逆水西遺跡(逆水遺跡a地点).....	9
写真4 神野芝山2号墳出土人骨-1.....	17
写真5 神野芝山2号墳出土人骨-2.....	18

写真6 神野芝山2号墳出土人骨-3.....	19
写真7 神野芝山2号墳出土人骨-4.....	20
写真8 沖塚古墳出土人骨-1.....	25
写真9 沖塚古墳出土人骨-2.....	26

表目次

第1表 神野芝山2号墳人骨の部位ごとの個体識別表... 14	
第2表 神野芝山2号墳出土人骨計測表..... 15	
第3表 沖塚古墳出土人骨内訳表..... 23	

第4表 沖塚古墳出土人骨計測表..... 24	
第5表 八千代市における古墳出土人骨一覧表... 30	



第1図 八千代市と掲載遺跡の位置

Ⅰ 各遺跡の概要

1 神野芝山2号墳

(1) 遺跡の立地

かのしばやま

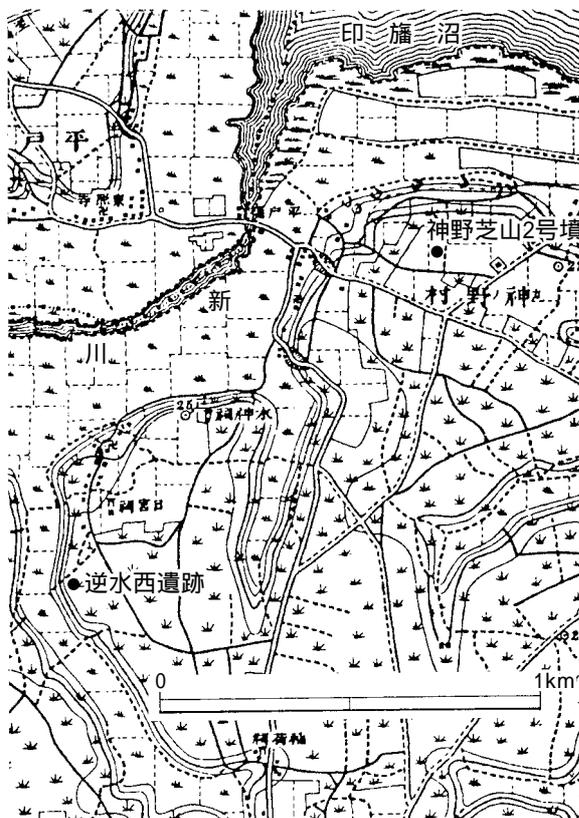
神野芝山古墳群は八千代市の北東部，神野字芝山に所在する。市域北部の低地にはかつて印旛沼が広がっており，神野芝山古墳群はその印旛沼に臨む台地上，標高21m前後のところに立地する。

(2) 神野芝山古墳群

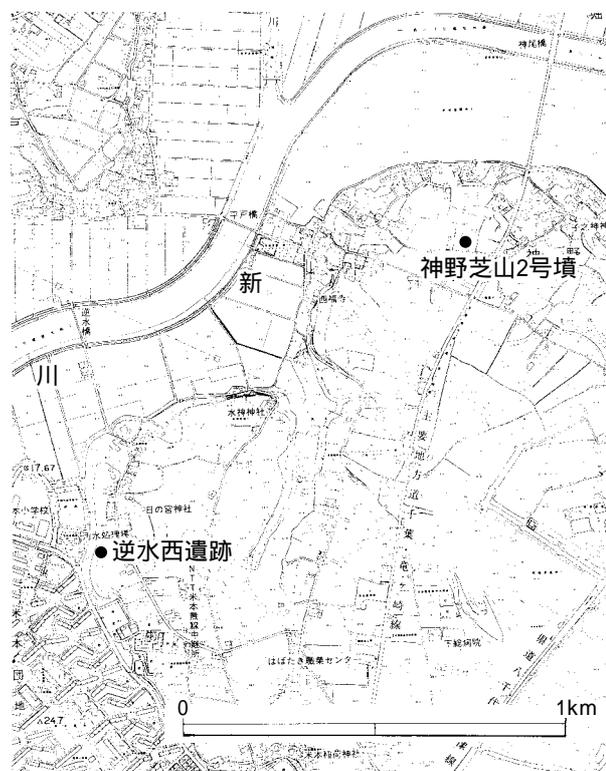
神野芝山古墳群及び2号墳の調査については，村田（1972，1979），堀部（1991）にまとめられている。それらによると，古墳群は4基の円墳が知られている。1号墳は，明治時代に破壊され，石棺から人骨，直刀が出土したという。石棺はそのまま埋めて目印として蓋石1枚が立てられている。古墳の規模などはわからない。3号墳は径20m，高さ70cmの低い円墳で，現存している。4号墳は推定で径40m，高さ5mの円墳であったという。大正時代及び昭和46年に破壊され現在は消滅した。主体部は粘土郭で，刀子・鏡・石枕・土師器壺の破片・形象埴輪片などが出土したという。石枕は現在八千代市立郷土博物館に展示されている。

(3) 調査に至る経緯

昭和47(1972)年4月，畑で作業中の耕運機が突然穴に落ち込むという事故が起きた。墳丘が失われた古墳の埋葬主体部である箱式石棺の蓋石が，耕運機の重さで割れたのである。石棺の中には多数の人骨が見えた。早速「神野芝山古墳発掘調査団」が編成され5月から発掘調査が開始された。



第2図 神野芝山2号墳と逆水西遺跡周辺の旧地形
明治15年迅速測図に加筆



第3図 神野芝山2号墳と逆水西遺跡の位置
八千代都市計画基本図1：10000に加筆

(4) 調査の結果

まず、古墳の規模については、周溝をトレンチで部分的に検出することによって、径約30mの円墳と判断した。箱式石棺は、厚さ10cm内外の雲母片岩製の蓋石・底石各4枚、側壁各2枚から成り、長さ2.4m、幅1m、深さ85cmである。

遺物は石棺蓋石の上から丸玉1点、石棺内部から人骨の他に、瑪瑙製勾玉12点、琥珀製棗玉13点、碧玉製管玉1点、刀子、鉄鏃などが出土した。

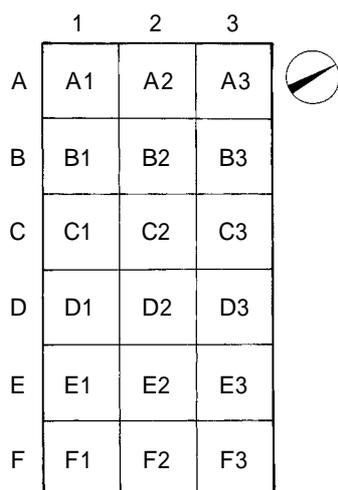
人骨の出土状況は、村田（1979）によると、「人骨の頭部は北側にあり頭蓋骨から足の骨までびっしりとつまった状態で、しかも雑然と埋納されていました。そして一番左端の一体だけが整った形に置かれてありましたから、あとから追加埋葬をする時に、前の分の人骨をかたよせたわけです。遺体のとり扱い方が何とも乱雑なようでした。したがって、鉄鏃は頭の方にありましたが、勾玉やなつめ玉のほとんどは足の骨とごっちゃになっていたのです。」と記録されている。

(5) 人骨の取り上げ方法について

神野芝山2号墳の人骨の取り上げ方法及び番号の付け方について記しておきたい。

第4図に示したように、石棺内部を18分割し、長軸をA、B、C、D、E、Fとし、短軸を1、2、3として、A1、A2、A3、...F3という区名をつけた。細かい骨などは、区ごとに一括で取り上げられている。付きの骨は1～40である。これとは別に頭蓋骨には1（頭蓋1）～8（頭蓋8）が付けられたものがある。以上は、発掘当時に付けられた番号である。

区名の後の数字は、保管されていた単位（ビニール袋や綿にくるまれていた塊など）ごとの区別のために、今回付けたものである。また、「衣11-2」というような番号があるが、これは、資料が以前は衣装箱に入れられており、ラベル等が付いてなかったため、「衣装箱 11の中の2単位目」という意味で今回付けたものである。



第4図 神野芝山2号墳石棺内の区分図と石棺の写真

写真1 神野芝山2号墳



(1) 調査区全景



(2) 周溝の断面 (Aトレンチ)



(3) 石棺検出状況



(4) 石棺内人骨出土状況 - 1 -



(5) 石棺内人骨出土状況 - 2 -



(6) 石棺内人骨出土状況 - 3 -



(7) 石棺底石遺物出土状況 (玉類・鉄鏃)

2 沖塚古墳

(1) 遺跡の立地

沖塚古墳は八千代市の南部，村上字沖塚前2287の22ほかに所在する。新川の東岸にある辺田前・沖塚前低地の南側の台地上，標高22～23mのところ立地する。

(2) 調査に至る経緯

昭和61(1986)年8月に，沖塚遺跡の一部を対象として，宅地造成のため「文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）に提出された。千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の回答案件であった。同年9月に市教委が試掘を行うなど，一連の手続き後，同年10月に県教委から古墳1基が所在する旨の回答が出された。この古墳は新発見であった。これを受けて協議が行われたが，開発計画の変更はできず，「沖塚古墳」として本調査実施の準備に移り，昭和63(1988)年9月から平成元(1989)年1月まで調査を実施した。

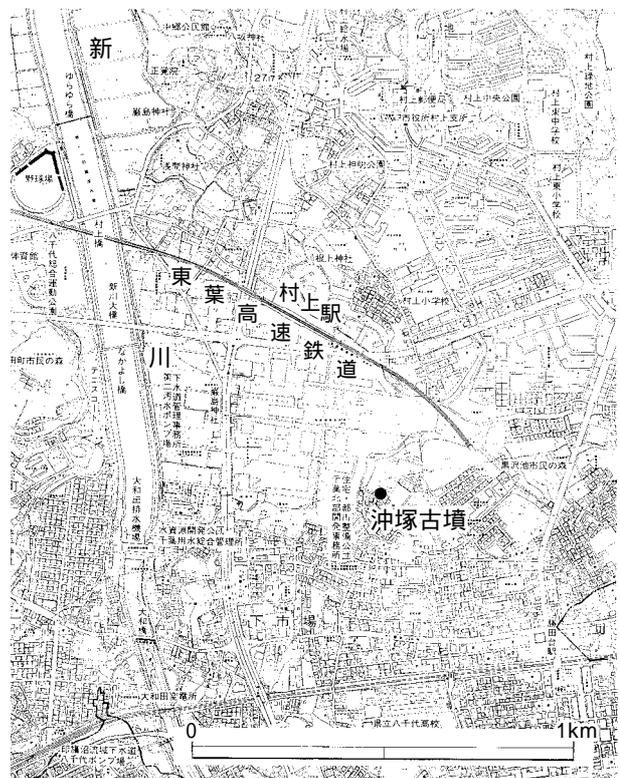
(3) 調査の結果

調査結果については，堀部（1991）に略述されている。それによれば，墳丘の一部は，隣接するゲートボール場造成の時に削平されていたが，概ね古墳の規模は，直径約23m，墳丘の高さ1.6mの円墳と判明した。墳丘の中段位には，全周するテラス状の平坦面があった。周溝は幅1.5～5mで，全周せず墳丘の南側で途切れブリッジ状になっている。

埋葬主体部は，貝化石岩を使用して構築された横穴式石室である。羨道部は墳丘南側の周溝内から掘り込まれていた。玄室（遺体を納める部屋）入口までの南側には大小の整形されていない石が積まれるような状態ではめこまれ，入口は1枚の板石で閉鎖されていた。玄室内部には底石は無く，ローム層が



第5図 沖塚古墳周辺の旧地形
明治15年迅速測図に加筆



第6図 沖塚古墳の位置
八千代都市計画基本図1：10000に加筆

底面となっていた。玄室側面の石積み状態は、奥壁に向かって左側面は大型の石が天井部までしっかり積まれていたが、右側面は中段まで大型石で中段以上は大型と小型とが使われていた。両側面ともに天井に向かって狭まるように持ち送り状で積まれていた。玄室中央部付近から奥壁にかけて石が一段高く積まれていて、天井に段差があったと考えられる。この主体部は、既に盗掘されていたらしく、天井石が破壊されたり持ち出されたりして1枚しか残っていなかった。玄室内には副葬品がほとんど見られず、小鉄片2点のみ確認した。人骨の出土状態も、玄室内の一隅にまとめられた状態であり、盗掘時に移動されたものと考えられた。

その他の遺物としては、墳頂部付近で完形の須恵器が、ブリッジ状のところと主体部よりやや上段の墳丘傾斜面から甕・壺などの破片がまとまって出土した。

貝化石岩は、印旛沼東岸に分布する方墳の石室材料として使われる例が多い。分布域を離れ、墳形の異なる沖塚古墳の存在は、興味深いものである（栗田1992）。

写真2 沖塚古墳



(1) 沖塚古墳全景



(2) 石棺内人骨出土状況 - 1 -



(3) 石棺内人骨出土状況 - 2 -



(4) 石棺内人骨出土状況 - 3 -



(5) 石棺内人骨出土状況 - 4 -



(6) 横穴式石室全景

3 逆水西遺跡（逆水遺跡 a 地点）

（1）遺跡の立地

本遺跡は、市域北東部の米本地区に所在し、市域中央を流れる新川東岸の台地上に位置する（第2・3図）。台地の東西は、それぞれ南北に入り込む谷津に区画され舌状台地となっている。今回の調査区は、北から延びる谷の東側台地縁辺の標高約24mのところ、水田面との比高は約17mである。遺跡の西側一帯は現在では造成され米本団地となっている。北側は新川流域の水田面が広がっている。遺跡の現況は山林及び畑が中心であるが、今回の調査区は墓地に隣接する荒蕪地であった。

（2）調査に至る経緯

平成7(1995)年11月、墓地造成のため、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会に提出され、これを受けて現地踏査を行った。照会地の近隣の畑で弥生～古墳時代等の土器片が散布していることから、遺跡が存在すると判断し、その旨の回答を事業者に行い、埋蔵文化財の取り扱いについての協議が進められた。まずは、遺跡の性格・規模を把握するための確認調査を平成8(1996)年1月に実施し、弥生時代の住居跡等が検出された（八千代市教委1996）。確認調査の結果を受け、さらに事業者との協議を進めた。その結果、記録保存（本調査）の措置をとることとなり、準備の整った平成8年4月に本調査に着手した。

（3）調査の結果

本調査によって、弥生時代後期の住居跡4軒・土坑1基、中近世の土坑19基を調査することができた（注）。中近世の土坑はいずれも遺物が少なく、合計33枚の銅銭とわずかな骨片等であった。これらの遺物と規模・形態・覆土堆積状況等から見て、いずれも墓坑と考えられる。時期は概ね15世紀～17世紀前半の範囲にはいるものと推定する。今回分析を委託した骨片が出土した土坑は、6Pと8Pの2基である。以下、2基の土坑の概略を報告する。

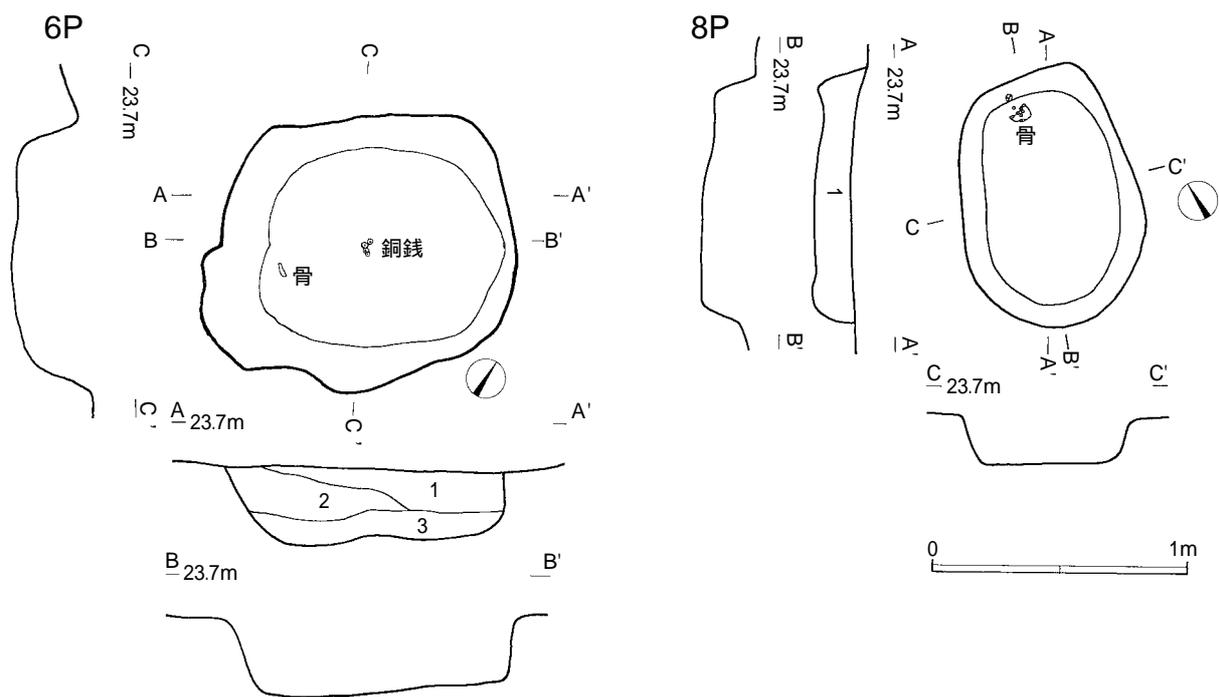
6P

約1.13m×1.08m、確認面からの深さ約30cmの隅丸方形の土坑で、底はほぼ平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はしまりの弱い暗褐色土で、ロームの入り方によって3層に分層した。1層は、多量のロームがにじむように混じり径2cm程度のロームブロックを含む。2層は、少量のロームと黒色土がにじむように混じる。3層は、多量のロームが均一に混じる。人為的な堆積と考えられる。骨片は、南西コーナー付近で覆土下層から出土した。他に永楽通宝などの銅銭5枚が、遺構中央の覆土下層から出土した。

8P

約1m×0.7m、確認面からの深さ約20cmの楕円形の土坑で、底はほぼ平坦、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はロームが多量混じり、しまりの弱い暗褐色土1層のみで、人為的な堆積と考えられる。骨片は北壁付近の覆土下層から出土した。古銭等、その他の遺物は出土しなかった。

（注）本整理が未着手のため、遺構数については今後若干の増減が予想される。



第7图 逆水西遺跡 6P・8P実測図

写真3 逆水西遺跡（逆水遺跡a地点）



(1) 6P土層と遺物出土状況



(2) 6P完掘状況



(3) 8P人骨出土状況 - 1 -



(4) 8P人骨出土状況 - 2 -

II 人骨の分析

1 神野芝山 2号墳出土人骨

(1) 緒言

神野芝山古墳群は、千葉県八千代市神野字芝山に所在し、4基の円墳で構成されている。昭和47年4月、農作業中に偶然人骨が出土した。人骨が検出されたのは2号墳で、石棺内から複数の人骨とともに刀子、鉄鏃、勾玉、管玉、琥珀玉などが出土している。人骨は石棺のほぼ全域から散乱した状態で出土しており、個体毎の記載は不可能である。したがって、それぞれの部位ごとに記載する。

なお、本文中の数字の単位はmm、示数は%である。さらに、人骨にはそれぞれ のついた取り上げ番号、あるいはアルファベットと数字で示してある区域番号がついている。取り上げ番号の詳細は の1(5)を参照されたい。

(2) 出土人骨

頭蓋

頭蓋は6体分検出されている。

頭蓋1 頭蓋冠は保存されているが、左右側頭骨、顔面の右側、頭蓋底が破損している。頭蓋は、表面が風化のために剥離しているが、頭頂付近から後頭にかけては、骨壁内部まで朱色に染まっている。頭蓋の上面観は卵円形を呈している。最大長(186)、最大幅(142)とも大きい。頭示数76.3は中頭に属する。頭蓋の主三縫合は、外板では半分以上が癒合消失し、内板は完全に消失している。また、内板ではクモ膜顆粒小窩が顕著で、静脈溝の圧痕が極めて明瞭である。後頭骨において外後頭隆起はない。左乳様突起は非常に大きく頑丈で、ほぼ真下に下垂している。乳突上稜は明瞭で、良く発達している。前頭骨では、眉間や眉弓の隆起が極めて顕著である。鼻根部は、古墳時代人に見られる平坦さはなく、陥入している。眼窩上縁は曲線を呈している。左眼窩はやや低く(眼窩高37/眼窩幅43)、隅丸長方形である。上顎骨前頭突起は前方向にやや突出している。鼻幅は左側の状態から広鼻と思われる。犬歯窩はない。前頭骨頬骨突起は左右とも太く頑丈である。最小前頭幅は102で大きい。前頭骨の上方向への立ちあがりはなく、頭頂部で高まり後方へと続く。いわゆる「額」は狭く、前頭結節はない。上顎歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

$\frac{7}{\quad} \quad | \quad / \quad / \quad / \quad / \quad 6 \quad 7$

は、歯が死後脱落、歯槽開放
/は、歯槽骨破損

歯の咬耗程度は、エナメル質が磨り減っているだけであり、プロカの に相当する。

以上のことから、明らかにこの頭蓋は男性と思われ、年齢は壮年半ばと推定される。

頭蓋3 顔面と左右頬骨弓が破損している。頭蓋上面観は菱形を呈している。縫合の走向は単純である。癒合状態は、外板でも内板でも開いている。頭蓋は、頭示数79.1(最大幅144/最大長182)で長頭に属する。最大長と最大幅は古墳時代男性平均値と大差ない。頭頂孔は左のみ開存している。後面観は頭頂部分が高く家型である。外後頭隆起が存在する。項平面は広く、生前の筋肉の良好な発達が伺える。側面観では、前頭骨はほとんど立ちあがらずそのまま後方へ続き、頭頂部で最高点に達している。側頭線はやや上方に立ちあがり、冠状縫合付近まで明瞭であるが、頭頂付近はあまり顕著ではない。後半において乳突上稜とつながり、非常に良好に隆起している。プレリオンは左では正常であるが、右ではX型である。乳様突起は左右とも大きく頑丈である。外耳孔は大きな円形を呈している。前面観では、眉間

や眉弓の隆起は非常に顕著である。鼻根部の陥入は深く平坦ではない。眼窩上縁は曲線を呈している。前頭骨頬骨突起は太く頑丈、頬骨との接合面が広い。また、上顎骨の歯槽骨の大部分が保存され、歯槽には歯が2点、歯根が2点植立している。保存状態は以下の歯式の通りである。

3	6	数字は、根のみ残存
---	---	-----------

咬耗は、エナメル質がわずかに磨り減っている程度で、プロカの に相当する。底面観では、大後頭孔は大きく類菱形を呈している。

以上のことからこの頭蓋は明らかに強壮な男性であったと思われる。年齢は、歯の咬耗が少ないことから青年と推測される。

頭蓋4 前頭骨と頭頂骨の右側が保存されている。縫合の走向はやや複雑で、ラムダ縫合の右側に縫合骨が2箇所ある。前頭縫合残存が1cmほど認められる。前頭骨においては眉間や眉弓の隆起は全くない。前頭結節は極めて明瞭である。前頭骨はほぼ垂直に立ちあがり、後方へ続いている。側頭線は不明瞭でありほとんど確認できない。最小前頭幅は約89ほどである。頭頂骨の右側では頭頂孔が開存している。骨質が薄く、形態的にも明らかに未成年のものである。

頭蓋6+7 部分的に破損した前頭骨と頭頂骨が部分的に保存されている。縫合の走向はやや複雑であると思われる。残存しているラムダ縫合には縫合骨が2箇所確認できる。癒合状態は、冠状縫合と矢状縫合では開離している。ラムダ縫合では癒合が始まっている。内板では、クモ膜顆粒小窩が非常に顕著に認められる。前頭骨では、眉間や眉弓の隆起は認められない。鼻根部は平坦である。眼窩上縁はやや直線的である。眼窩上壁にクリブラ・オルビタリアはない。

この頭蓋の性別は女性の可能性が高い。年齢については、明らかにこの頭蓋のものと思われる歯が2点検出されている。

7	8
---	---

咬耗程度はエナメル質が磨り減っている程度であり、プロカの に相当する。したがって年齢は、壮年前半程度と推測される。

頭蓋8+4 左右側頭骨と、顔面から頭蓋底、後頭骨の一部が大きく破損している。頭蓋冠が保存されている。全体的に大きい。頭示数75.5(最大幅142/最大長188)は中頭に属する。上面観は五角形を呈している。縫合の走向はやや複雑で、ラムダ縫合には3箇所の縫合骨が確認できる。癒合状態は、外板でも内板でも開離している。眉間や眉弓はわずかに隆起している。鼻根部は平坦である。眼窩上縁は概ね曲線である。左前頭骨頬骨突起は中程度の大きさである。前頭結節はない。いわゆる「額」は狭く、そのまま高まりながら頭頂骨へと続いている。以上のことから、この頭蓋は男性と思われ、年齢は青年から壮年前半と推測される。

頭蓋E 前頭骨が保存されている。眉間や眉弓の隆起が概ね良好で、鼻根部は平坦ではない。前頭骨の立ちあがりは低く、後方に続いている。冠状縫合は内板では完全に癒合消失している。外板では癒合が進み、消失している箇所がみられる。したがって、性別は男性と推測され、年齢は壮年期と思われる。

下顎骨

下顎骨は6体分出土している。

B1 - 右下顎頭と左下顎体の一部がわずかに破損している。下顎枝幅は概ね広い(37.3)。オトガイ隆起とオトガイ結節がわずかに認められる。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

8 7 6 5 4 3	5 6 7
-------------	-------

咬耗は、点状に象牙質が露出しており、プロカの ~ に相当する。

B2 一括 頭蓋4と一致すると思われる。下顎体の正中から左側が保存されている。歯の保存状態は以

下の歯式の通りである。左下顎第1大臼歯が歯槽内に埋伏している。年齢は6才以前である。

| iv v

F1 オトガイ付近の歯槽骨が保存されている。オトガイ隆起は比較的明瞭に発達している。歯槽の状況は以下の通りである。

|

詳細な年齢は不明である。

F2 骨表面の傷みがあるが、概ね原型を保って保存されている。下顎角外側、内側には畝状の隆起が数条認められ、咬筋の良好な発達が伺える。オトガイ隆起およびオトガイ結節の発達は弱い。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

x 6 | 2 3 4 x 6 x x xは、歯が生前に脱落し、歯槽閉鎖

咬耗は、象牙質が線状、部分的には面状に露出している。プロカの ~ に相当する。したがって、壮年半ば~後半であると思われる。

E3 左右の下顎枝が大きく破損し、歯列弓と歯槽骨が保存されている。オトガイ隆起やオトガイ結節の発達は弱い。下顎体は高く、頑丈である。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

8 7 6 5 4 3 2 1 | 1 2 3 4 5 6 7 /

咬耗は、象牙質が線状および面状に露出している。特に、右側の咬耗が強く、右第1大臼歯と第2大臼歯は歯頸部近くまで磨り減っている。したがって、プロカの ~ に相当する。したがって、壮年後半と思われる。頭蓋Eと同一の可能性が高い。

D2一括 オトガイ付近の下顎体が保存されている。オトガイ隆起およびオトガイ結節の発達は強い。正中部分の歯槽骨表面から歯がわずかに露出している。根尖は下顎骨の右内側にみられる。歯の保存状態は以下の歯式の通りである。

| x

年齢は歯が保存されていないので不明であるが、男性のものと思われる。頭蓋3と同一である可能性が考えられる。

遊離歯

遊離した永久歯は70点、乳歯は8点、合計78点が以下の通り保存されている。

永久歯

	右				左			
	大臼歯	小臼歯	犬歯	切歯	大臼歯	小臼歯	犬歯	切歯
上	8	4	4	5	4	3	1	5
下	3	5	4	7	7	3	2	5

乳歯

	右			左		
	乳臼歯	犬歯	切歯	乳臼歯	犬歯	切歯
上	1				1	2
下	2			2		

下顎骨の植立している歯と遊離歯の保存を考慮すると、下顎骨の左右第1大臼歯が6点ずつ保存されている。また、乳歯の残存状態とそれに伴う永久歯の萌出状態から、3才前後の幼児と7~10才程度の小

児が保存されていることがわかる。したがって、成人が少なくとも6体、幼児と小児が1体ずつ埋葬されていたと思われる。

上腕骨

上腕骨は右が6点(9・ 21・ B1・ E2・ F1・ 衣11-4),左が8点(6・ 18・ E・ E・ E2・ F1・ F2・ 衣11-1)保存されている。それらのうち, 9と 18は対である。頭蓋3と同一個体と思われる。21は最大長が長い(330)。三角筋粗面は広く,明瞭に隆起している。また,右上腕骨(B1)と6の左上腕骨は同一個体である。左右とも三角筋粗面が広く明瞭で,骨体は太い。頭蓋3の男性に匹敵する個体であると思われる。また,右上腕骨F1は骨体が細く華奢である。三角筋粗面もほとんど確認できない。未成年のものであると思われるが対になる左上腕骨はなく,破片になっている。取り上げ番号衣11-4(右)と衣11-1(左)は対であり,先のF1より小さい3~4才程度の幼児と思われる。骨体の遠位端が保存されている。それ以外の上腕骨は,骨端の破損と骨表面の傷みがあり個体の同定は不可能である。

尺骨

尺骨は右が5点(D1・ B2一括・ 5・ F1・ C1-),左が6点(C3・ D2・ 衣11-2・ B1・ E2・ 16)保存されている。B2一括と衣11-2,D1とD2, 5とB1はそれぞれが対になる。骨頭が非常に大きく,骨体が太く頑丈である。骨間縁の発達も明瞭で,3個体とも頑丈で強壮な男性である。5の最大長は253であることから,推定身長は藤井式で161cmとなる。3体とも同程度の大きさである。F1もこの3個体と同程度の大きさである。C1- は骨体の近位半が保存されている。骨体は女性平均と大差ない。したがって女性の可能性が高い。

橈骨

右2点(B3・ C1-),左3点(F1・ D1・ D2-)保存されている。右橈骨C1- は遠位半が保存されている。骨端は非常に大きい。左橈骨F1は骨体の中央部が保存されている。骨体は極めて太く,頑丈である。2点とも明らかに男性のものである。

大腿骨

右7点(2・ 17・ 31・ 38・ C3・ C1- ・ D2-),左5点(19・ 27・ C3・ F1・ 衣11-3)が保存されている。38と27, 17と19は対である。前者は頭蓋1に,後者は頭蓋3に属すると思われる。それぞれ骨体が非常に太く頑丈である。後面粗線は隆起し,付柱を形成している。38はほぼ完形で,最大長448である。そこから算定されるこの個体の推定身長は藤井式で165.5cmである。17・19の大腿骨も同様の大きさであることから,頭蓋3の個体も同程度の身長であると思われる。31とC3右大腿骨は2点とも先の2体と同様に,骨体が太く頑丈である。したがって,右大腿骨から判断すると7体のうち4体は強壮な男性であったと思われる。さらに,C3においては骨端部分に異常な骨増殖があり,骨棘の形成が著しい。骨表面は粗造で多孔状態である。関節炎の可能性が高い。D2- とF1は小児の骨である。骨頭は未癒合で,骨体の太さは10才前後と大差ない。

脛骨

右7点(28・ B3・ B3・ B3・ C2・ D2- ・ E),左8点(C1・ 23・ 35・ 40・ F2・ 8+F1・ E2・ B3)が保存されている。28と40は骨体が非常に太く,頑丈である。断面は二等辺三角形を呈している。B3とC1は頭蓋3にともなう強壮な男性のものである。EとE2は骨体が細く華奢である。Eは骨端が未癒合である。E2は骨頭が癒合したばかりである。同一個体の可能性が高い。

腓骨

腓骨は8点保存されている。右は5点(11・ 15・ B3・ F2・ C1-),左は3点(16・ B3・ B3)である。8点とも断片的で完形はない。15と16は,骨体の中央部が保存されている。骨体が極めて

太く頑丈で、骨体断面は縄文人のものと思われるほど槌状である。頭蓋3の個体に属すると思われる。右のB3・F2・C1- は大きく頑丈な骨端や太い骨体が保存されている。明らかに男性のものである。

鎖骨

鎖骨は右が3点(C2・ 30・F2)保存されている。C2と 30はほぼ完形である。長さは長く(最大長140),周は太い。大胸筋付着面が広く平面となっている。2点とも非常に頑丈な鎖骨である。一方、F2は骨体が非常に細く華奢である。未成年のものと思われる。

膝蓋骨

右が2点(15・ 16)保存されている。大きさは中程度である。特に骨棘の形成はない。

寛骨

右4点(1・ 39・F2・F1)と、左が6点(10・ 24・ 34・ 36・ 37・D2-)保存されている。D2- の左寛骨は、小児の腸骨のみが保存されている。大坐骨切痕は未成年のため性別の判断が困難である。F1と 10は対になる。保存状態が不良で、腸骨のほとんどが破損している。大坐骨切痕の湾入は鈍角で女性のものと思われる。また、 36も大坐骨切痕の湾入が鈍角で、女性と推測できる。また、妊娠・出産経験があったようで耳状面前溝が深く明瞭である。対になる右寛骨は細かい小片になったと思われ確認できない。それ以外の寛骨は、大坐骨切痕の湾入は鋭角で、寛骨臼は大きく、明らかに男性のものである。

踵骨

右5点(15・B3・B3・B2一括・衣11-4),左5点(13・ 16・B3・B2一括・B2一括)保存され、左右不明のものが1点(F2-)ある。 15と 16は対であり、頭蓋3に属する一連の強壯な男性のものと思われる。

距骨

右3点(D2- ・B2・B3),左3点(B2一括・B2一括・B3)が保存されている。6点ともほとんど同程度の大きさである。

(3) 小結

この石棺から出土した人骨の総数は少なくとも8体と算定された。その内訳は、歯や大腿骨、脛骨の保存状態から成人6体であり、未成年は幼児と小児の2体である。成人6体の性別は、男性は4体、女性は2体である。年齢は成人でも比較的若い青年期～壮年半ば程度である。熟年や老年などの年齢が進んだ個体は見られなかった。人骨の観察の結果、個体識別を以下の表に示した。

第1表 神野芝山2号墳出土人骨の部位ごとの個体識別表

保存部位	未 成 年		成 人					
	幼児(3才前後)	小児(7~10才)	♂ 青年	♂ 壮年半ば	♂ 青年~壮年	♂ 壮年	♀ 壮年	♀ 不明
頭蓋骨		頭蓋4	頭蓋3	頭蓋1	頭蓋8+4	E	頭蓋6+7	
下顎骨	B2一括		D2	F2	B1-②	E3		
鎖骨		F2		C2 No.30				
上腕骨	衣11-4・衣11-1	F1	No.18・No.9					
橈骨								
尺骨			D1・D2	衣11-2・B2一括				
大腿骨		D2-③・F1	No.17・No.19	No.38・No.27			C1-⑩	
脛骨		E・E2	B3・C1	F2 No.28・No.40				
腓骨			No.15・No.16	B3 F2 C1-①		B3 B3	No.11	
寛骨		D2-③	No.1・No.37	No.39 F2	No.24 No.34		F1・No.10 No.36	
踵骨			No.15・No.16					

形態的な特徴として男性4体の頭蓋は、古墳時代としては眉間や眉弓の隆起が明瞭で、鼻根部の陥入が強い。また、四肢骨では、上腕骨の骨体の大きさは普通であるが、前腕骨が頑丈である点、大腿骨は太く長く、頑丈であり後面粗線が隆起している点など非常に良く似た特徴である。全体として高身長で強壯な体格である。一方、女性人骨の保存はあまり良好でなく、形態的特徴はわからなかった。なお、人骨に認められた病的所見は、大腿骨(C3)に見られる関節炎である。

総合すると、一般的な古墳時代人より体格が良く、立体的な顔立ちである。しかしそれは縄文時代人にみられるほどの特徴ではない。したがって、当石棺から出土した人骨は古墳時代人として全く矛盾のない形態であり、少なくとも男性4体については、頭蓋や四肢骨の類似した特徴から判断するとなんらかの血縁関係があったと推測できる。

最後に、これらの人骨の観察所見および個体識別を経て、「頭蓋3の個体」と思われる人骨のほぼすべてに塗朱痕跡があり、比較的保存状態が良好である。したがって、これが最終埋葬者であった可能性が高い。「頭蓋3の個体」(青年男性)に所属する部位以外に、一箇所に集められた頭蓋とE・F区の人骨にほぼ集中して「朱」が付着していることを考えると、最終埋葬者の埋葬時、あるいはその骨化後に「塗朱」したと思われる。

なお、「塗朱」の時期について埋葬のどの段階でおこなわれるか従来から問題になっている。少なくとも今回の石棺出土人骨に見られる「塗朱」は、最終埋葬者の埋葬後(埋葬直後の軟部が付着している時期か、完全に骨化後かは不明)に、それ以前の埋葬者は完全に骨化後に「塗朱」されていることがわかる。換言すれば、当石棺の埋葬完了を示すものかもしれない。

(梶ヶ山真里・馬場悠男)

第2表 神野芝山2号墳出土人骨計測表

(1)

上腕骨/NO.	6	21	B1	E2-②
最大長		33cm		
体最大径	19	24.9	20.3	22
体最小径	16.3	18	16.8	19.6
体断面示数	85.7	72.2	82.7	89.1

(2)

橈骨/NO.	B3
体中央横径	16.8
体中央矢状径	10.4
体断面示数	61.9

(3)

尺骨/NO.	5	D2	D1	B2一括	F1	C1-⑧	衣11-2
最大長	253	25cm					
体矢状径	15.2	13.4	13.3	14.3	14.7	11	13.4
体横径	16.7	16.7	16.4	17.8	15.5	15	16.5
体断面示数	91	80.2	81.1	80.3	94.8	73.3	81.2

(4)

大腿骨/NO.	2	17	19	27	31	38	D2-③小児	C1-10	衣11-3
最大長	385	430				448			
体中央矢状径	26.4	31	29	28	29	31.3	16.6	24.3	26.5
体中央横径	25.5	28.1	25.5	29.4	25.5	28.4	18	28.7	25.6
体中央断面示	103.5	110.3	113.7	95.2	113.7	110.2	92.2	118.1	103.5
周	83	93	90	90	90	90		83	82

(5)

脛骨/NO.	23	35	D2-②	E2-②	B3	B3	C2	C1
最大長		370						
中央最大径	30	28	23	16.9	29.9	25.8	31.8	32
中央横径	22.5	20	33	19.6	22	21	22.8	20.6
体断面示数	75	71.4	69.7	86.2	73.5	81.3	71.6	64.3

(6)

腓骨/NO.	16	B3	B3
体最小径	13	11	11.9
体最大径	19	12.3	14
体断面示数	68.4	89.4	85

写真4～7 神野芝山2号墳出土人骨写真

写真4 頭蓋3に代表される個体

1. 前面観 2. 後面観 3. 上面観 4. 右側面観 5. 底面観 6. 左面観
7. 右寛骨(1) 8. 左寛骨(37) 9. 右大腿骨(17)
10. 左大腿骨(19) 11. 仙骨(E2) 12. 右脛骨(B3)
13. 左脛骨(C1) 14. 右尺骨(D1) 15. 左尺骨(D2)

写真5

1. 頭蓋(1) 2. 頭蓋(8+4) 3. 小児頭蓋(4) 4. 頭蓋(E)
5・6. 頭蓋(6+7) 7. 下顎骨(B1-) 8. 下顎骨(E3) 9. 右鎖骨(F2)
10. 右鎖骨(30) 11. 右鎖骨(C2) 12. 左右尺骨(5・B1)
13. 左右尺骨(B2一括・衣11-2) 14. 右尺骨(C1-) 15. 左尺骨(E2)
16. 右尺骨(F1) 17. 左橈骨(B3) 18. 左橈骨(C1-) 19. 右橈骨(F1)
20. 右橈骨(D2-) 21. 右橈骨(D1)

写真6

- 1～5. 右上腕骨(21・ 9・B1・E2・F1)
6～11. 左上腕骨(F2・ 6・E・E・F1・ 18) 12. 小児上腕骨(衣11-4・11-1)
13～19. 左脛骨(40・ 8+F1・F2・ 35・B3・ 23・E2)
20～24. 右脛骨(B3・D2- ・B3・E・ 28)

写真7

- 1～3. 右寛骨(F1・ 39・F2) 4～8. 左寛骨(24・ 34・D2- ・ 36・ 10)
9～14. 右大腿骨(38・ 31・ 2・C1- ・C3・D2-)
15～18. 左大腿骨(F1・ 27・C3・衣11-3)

写真4 神野芝山2号墳出土人骨 - 1 頭蓋3に代表される個体

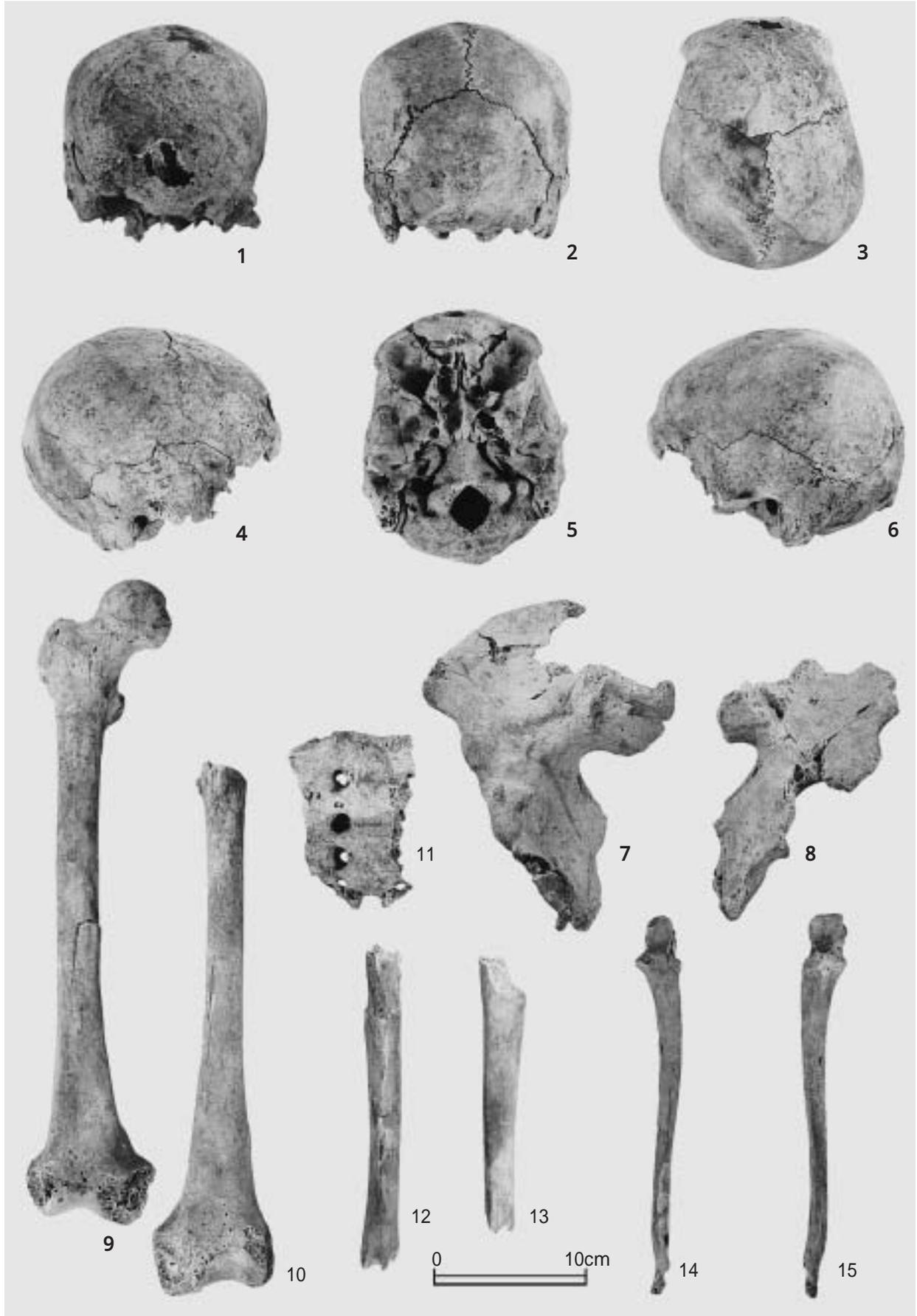


写真5 神野芝山2号墳出土人骨 - 2

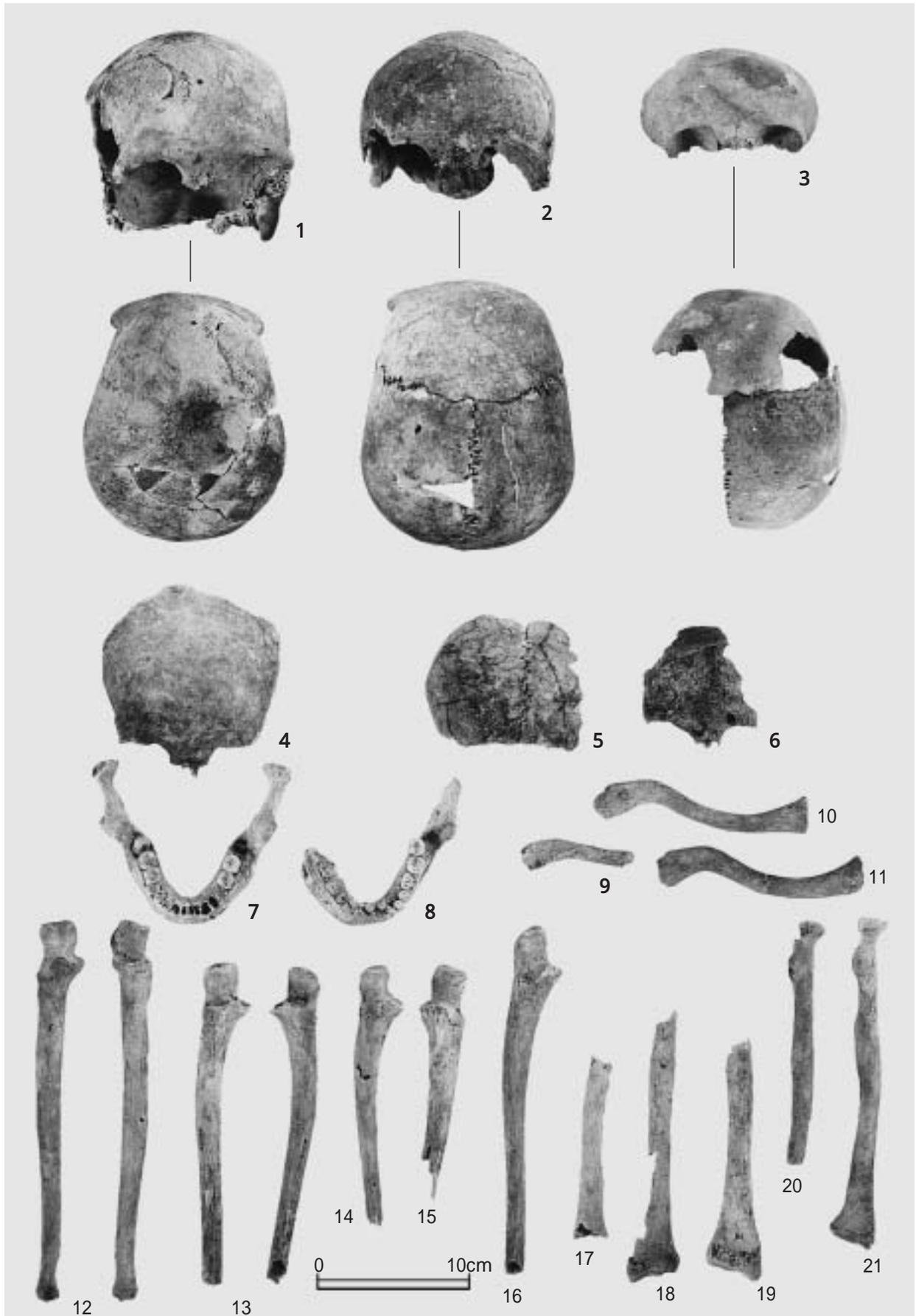


写真6 神野芝山2号墳出土人骨 - 3

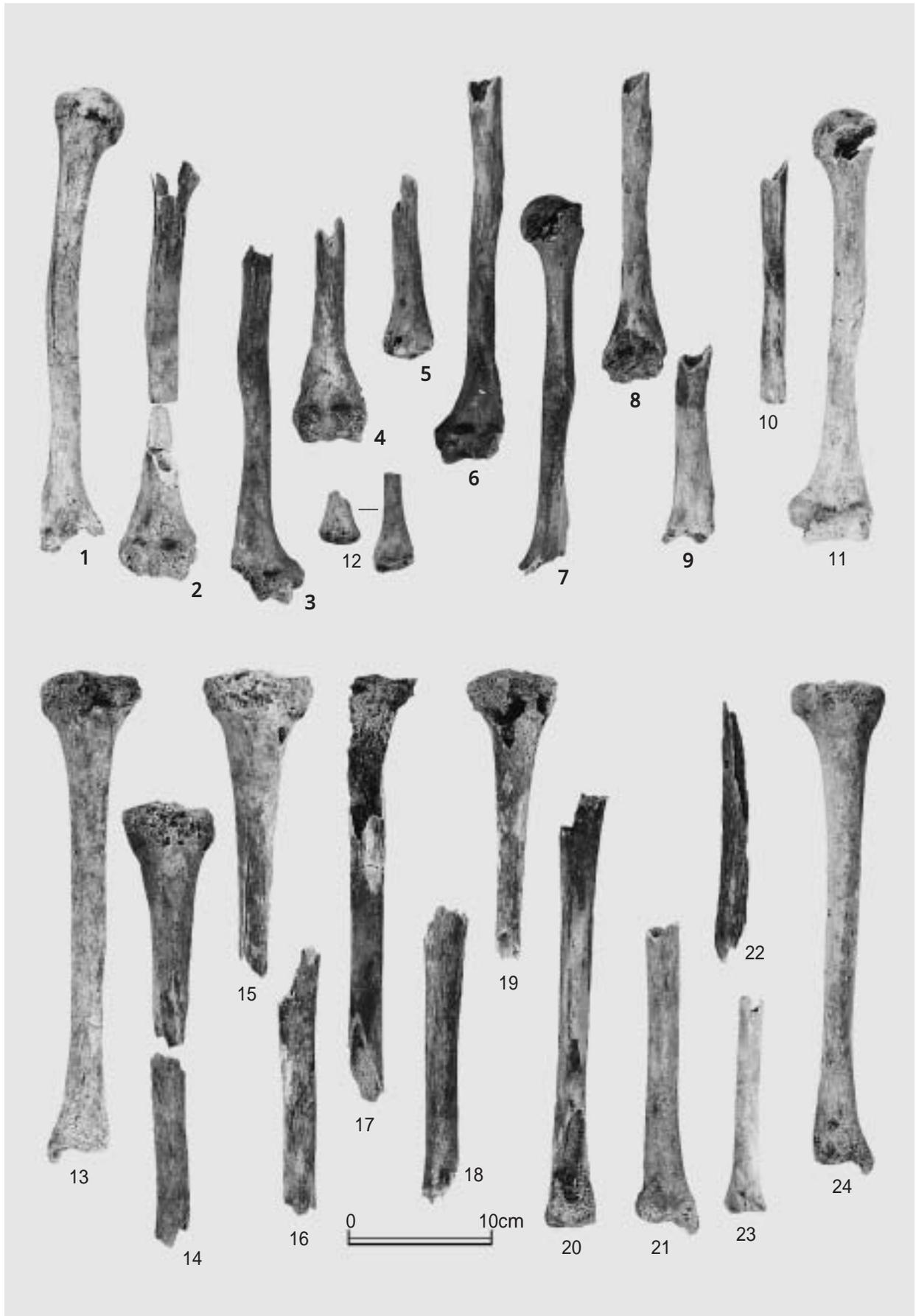


写真7 神野芝山2号墳出土人骨 - 4



2 沖塚古墳出土人骨

(1) 緒言

沖塚古墳は、八千代市村上字沖塚前2287 - 22他に所在する円墳である。墳丘の規模は直径23m、高さ1.6mである。主体部は横穴式石室で、羨道部は南側から掘り込まれている。玄室内に石棺はなく、一枚の板石で玄室が区切られている。床面は床石がなく、直接ローム層であった。人骨は、全部で558点出土しているが、盗掘を受けた際に一隅にまとめられている。その半分程度は部位不明の骨片である。したがって、ここでは部位ごとに、代表的な人骨を取り上げて記載する。なお、本文中の計測値の単位はmm、示数は%である。

(2) 出土人骨

頭蓋

頭蓋は少なくとも3個体分が保存されている(145・305・350)。

145頭蓋 顔面から頭蓋底が大きく破損している。前頭骨の一部、頭頂骨、後頭骨が保存されている。三主縫合のうち冠状縫合は破損の為に確認ができない。矢状縫合とラムダ縫合の癒合程度は、内板では癒合消失が進み、外板では半分程癒合している。内板では、静脈溝の圧痕が明瞭である。顔面では、眉間の隆起は比較的顕著である。鼻根部の陥入は中程度である。また、鼻根部の縫合は閉じている。側頭骨の乳様突起は良く発達している。乳突上稜は比較的明瞭である。後頭骨では、外後頭隆起はないが、上項線と最上項線の間が帯状に隆起している。また、上顎骨の一部分と歯が保存されている。保存状態は以下の歯式の通りである。

$\frac{\quad}{\quad} \frac{7}{7} \frac{6}{6} \frac{5}{5} \frac{4}{4} \frac{3}{3} \frac{2}{2} \frac{1}{1} \quad \mid \quad \frac{1}{1} \frac{2}{2} \frac{3}{3} \frac{4}{4} \frac{5}{5} \frac{6}{6} \frac{7}{7} \frac{8}{8} \quad \frac{\quad}{\quad}$ /は歯槽閉鎖

歯の咬耗程度は、一部の歯において象牙質がわずかに露出していることから、プロカの ~ に相当する。カリエスは認められない。

この頭蓋は、側頭骨乳様突起や後頭骨の形態から明らかに男性であると思われる。また、年齢は壮年と思われる。

305頭蓋 頭頂骨と左側頭骨が保存されている。左側頭骨の乳様突起は基底部分が大きく、良く下垂している。外耳孔は大きな円形を呈する。明らかに男性のものと思われる。

350頭蓋 左顔面・左側頭骨・後頭骨が保存されている。左顔面の眉間および眉弓はわずかに隆起している。鼻根部の陥入は弱い。眼窩上縁は曲線を呈し、古墳時代人として典型的である。眼窩は大きく、眼窩形は隅丸方形である。頬骨弓はやや細い。左側頭骨の乳様突起は大きく、頑丈である。外耳孔は大きい。外後頭隆起はない。頭蓋の縫合は走向が複雑である。ラムダ縫合と矢状縫合の一部が確認でき、部分的に癒合が始まっている。ラムダ縫合には縫合骨がある。内板で静脈溝の圧痕が明瞭である。

この頭蓋に伴う歯は、以下の歯式の通りである。

$\frac{8}{8} \frac{7}{7} \frac{6}{6} \frac{5}{5} \frac{4}{4} \frac{3}{3} \frac{2}{2} \quad \mid \quad \frac{1}{1} \frac{2}{2} \frac{3}{3} \frac{4}{4} \frac{5}{5} \frac{6}{6} \frac{7}{7} \frac{8}{8} \quad \frac{\quad}{\quad}$ は、歯が死後脱落、歯槽開放

咬耗は、象牙質が露出しており、プロカの に相当する。したがって、この頭蓋の性別は男性で、年齢は壮年後半と推測される。

歯

永久歯の遊離歯が31点検出されている。歯式の歯種の下に記載してあるそれぞれの数字は、検出された本数である。上顎右第1切歯は3点とも未萌出である。

2	3 3		
7 6	3 2 1	1	6
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7		
	2 3	2	3

乳歯は13点保存されている。

v	iv	iii	i		i	ii	iii
v							iii iv
2							2

上記の歯の保存状態から、少なくとも4体分の歯であることがわかる。4体のうち3体は4～6才の小児である。もう1体は、永久歯の咬耗がプロカに相当するものがあるので、壮年と思われる。

鎖骨

鎖骨は左右それぞれ2点ずつ(右: 224・336,左: 84・491)保存されている。224の右鎖骨は、骨端の一部が破損しているので最大長は計測不可能であるが、骨体は長く太く(中央垂直径14/中央矢状径15),頑丈であることから明らかに男性のものと思われる。右鎖骨 336と左鎖骨 491においては、肋鎖靭帯の圧痕が明瞭で骨端部が大きい。したがって対である。男性のものと思われる。

上腕骨

上腕骨は右が5点(24・25・35・199・339),左が4点(1・8・94・287)保存されている。右のうち、25は前後径が小さく扁平な印象の骨体であり、199と339は三角筋付着面が明瞭である。24は、骨体が5cmほどしか保存されていない。その他に、上腕骨の下端の一部と考えられる骨片(35)が保存されている。1の左上腕骨は、骨体長が極めて長い。最大長が35cmを下らないと思われる。左上腕骨の287は339と、左上腕骨の94は199とそれぞれ対になる。骨体が細く華奢な点が類似している。NO.8は骨体の外側面が破損し、形態の特徴が不明瞭である。さらに、小児の右上腕骨が1点保存されている(469)。

橈骨

右が3点(55・77・153),左が2点(71・386)保存されている。153の右橈骨は、骨間縁の発達が極めて良好で、骨体は太く(矢状径11.5/横径17.0)頑丈である。橈骨粗面も良く発達している。古墳時代男性平均を上回る大きさである。明らかに男性のものである。それぞれ対になるものは確認できない。

尺骨

右が5点(26・94・106・217・428)と左が3点(11・31・96)保存されている。11左尺骨は、回外筋稜の発達が極めて良好である。骨体は太く(横径13.5/矢状径15),頑丈で、骨間縁の発達も極めて強い。右尺骨 217についても骨間縁の発達が極めて良好であるが、11と同一個体の断定はできない。さらに、小児の右尺骨が保存されている(428)。

大腿骨

右が5点(38・41・56・63・258)左が6点(6・7・54・57・59・289)保存されている。6と38は、骨体が太く頑丈で、後面粗線が良好に発達し、付柱を形成している。骨体周が左右とも88で、古墳時代男性平均85をやや上回る。明らかに男性のものとして推測される。54は、骨体が細く(体中央矢状径23.5/体中央横径27・周80),後面粗線の発達は弱く、女性のものである。7・57・59・289は太さ

から判断すると男性と思われる。 289の後面粗線の発達是比较的良好で、骨体は比較的最長い（最大長42cm）。推定身長は藤井式で約159cmである。対になる大腿骨は確認できない。 258の右大腿骨は骨端が未癒合であり、青年のものと思われる。以上のことから、明らかに男性5体、青年女性あるいは華奢な青年男性が1体埋葬されていたと推測される。

脛骨

右が4点（ 32・58・111・215）、左が7点（ 2・4・5+12・20・78・211・249）保存されている。4と58は対になると思われる。骨端が部分的に破損しているが、最大長35cm程度と思われる。推定身長が藤井式で約160cmである。骨体の表面に軽度の炎症反応が見られる。骨体の太さから男性のものと思われる。 211と215は、骨端が極めて大きく関節面も広い。右は最大長が35.7cmであり、そこから推定される身長は藤井式で162cmとなる。骨体も極めて太く（左：横径23/最大径30.8）頑丈である。左右ともヒラメ筋線は明瞭であり、生前の筋肉の良好な発達を伺える。強壯な男性であったと思われる。78も同様に太く頑丈で、強壯な男性のものであったと推測できる。対になる右脛骨は確認できない。一方、 2と32は骨体が華奢で細い（右：横径17.5/最大径22.5・左：横径19/最大径23）。女性のものか、あるいは若い男性のものである可能性が高い。左の骨表面には軽度の炎症反応が認められる。最後に、 111の右脛骨と 20の左脛骨は、対ではなく別個体のものである。

腓骨

右が5点（ 42・45・95・113・494）、左が4点（ 17・47・335・225）、左右不明が1点（ 233）保存されている。右の 45・42・95と左の 47の骨体が太く頑丈である。骨体断面は槌状である。右の 494と左の 225は、骨体が細く（右：最小径9/最大径12・左：最小径10/最大径13）華奢である。断面形が類楕円形で良く類似している。同一個体のもので、対になると思われる。

膝蓋骨

右は3点（ 188・239・459）、左は1点（ 380）保存されている。右の 188と左の 380はそれぞれ大きく頑丈であるが、右がやや小ぶりで同一個体ではない。計測できた 380の最大高は43.7、最大幅は45.6である。現代人男性平均（最大高41.1・最大幅45）をやや上回る値である。

距骨・踵骨

距骨は左右とも2点ずつ保存されている（右： 131・278 左： 206・403）。403には、蹲踞面として、滑車面の前方への延長を認める。

（3）小結

当古墳から出土した人骨は、少なくとも6体の成人と3体の未成年が合計9体埋葬されていたと思われる。内訳は以下の表の通りである。

第3表 沖塚古墳出土人骨内訳表

	未成年		成年		合計
	4～6才	青年	壮年前半	壮年後半	
男性			4	1	9
女性		1			
不明	3				

壮年男性のうちの2体は、推定身長が160cmを上回り、骨体が太く頑丈であることから、強壯な体格

であると思われる。成人のうち1体は華奢であり，成人女性あるいは青年男性と思われる。なお，この人骨の脛骨には炎症反応があり，骨膜炎などの病気に罹患していたと思われる。

出土人骨の顔面は鼻根部が概ね平坦であり，眼窩上縁が曲線を呈している。大腿骨の骨体断面は付柱を形成しておらず，脛骨はいわゆる扁平脛骨ではない。したがって，縄文時代人とは全く異なり，古墳時代人以降の人骨として典型的な形態である。古墳時代人として全く矛盾はない。

(梶ヶ山真里・馬場悠男)

第4表 沖塚古墳出土人骨計測表

(1)

上腕骨/NO.	1	94	199	287	339	469
最大長	35cm					
体最大径	21.5	18.5	20.5	19	20	11
体最小径	17.5	15	16	14	15	9
体断面示数	81.3	81	78	73.6	75	81.8

(2)

橈骨/NO.	55	153	386
体中央横径	16	17	16
体中央矢状径	11	11.5	11
体断面示数	68.8	67.6	68.8

(3)

尺骨/NO.	11	26	31	96	106	217	371	428
体矢状径	13.5	12.5	11	11.5	12.5	12	12	6.8
体横径	15	15	12	16.5	17.5	17	14	7
体断面示数	90	83.3	91.6	69.6	71.4	70.6	85.7	97.1

(4)

大腿骨/NO.	6	38	41	54	56	57	59	289
最大長	35cm	430						42cm
体中央矢状径	28.5	31	26	23.5	25	26	27	27.5
体中央横径	26	28.1	31	27	26	27.5	30.5	29.5
体中央断面示数	109.6	110.3	83.8	87.1	96.1	94.5	88.5	93.2
周	88	88	94	80	83	86	90	89

(5)

腓骨/NO.	42	45	47	113	233	355	494
体最小径	11	12.5	10	10	11.5	8.5	9
体最大径	18.5	16	18.5	16.5	17	12.5	12
体断面示数	86.4	78.1	54.1	60.6	67.6	68	75

(6)

脛骨/NO.	58	78	111	249
最大長	35cm			
中央最大径	32	30	26	10
中央横径	25	25	21.6	9.5
体断面示数	78.1	83.3	83.1	95

写真8・9 沖塚古墳出土人骨写真

写真8

- 1．左鎖骨(84) 2．右鎖骨(336) 3．左鎖骨(491) 4．右鎖骨(224)
 5～9．右腓骨(45・95・42・113・494) 10～12．左腓骨(17・47・335)
 13．左脛骨(小児 249) 14．左大腿骨(小児 356)
 15～19．右上腕骨(24・25・35・199・339) 20～23．左上腕骨(1・8・94・287)
 24～26．右尺骨(26・217・94) 27～29．左尺骨(96・31・11)
 30～32．右橈骨(55・77・153) 33・34．左橈骨(386・71)

写真9

- 1～5．右大腿骨(38・41・258・56・63)
 6～11．左大腿骨(6・7・57・54・59・289)
 12～15．右脛骨(215・58・111・32)
 16～21．左脛骨(78・20・5+12・4・2・211)

写真8 沖塚古墳出土人骨 - 1

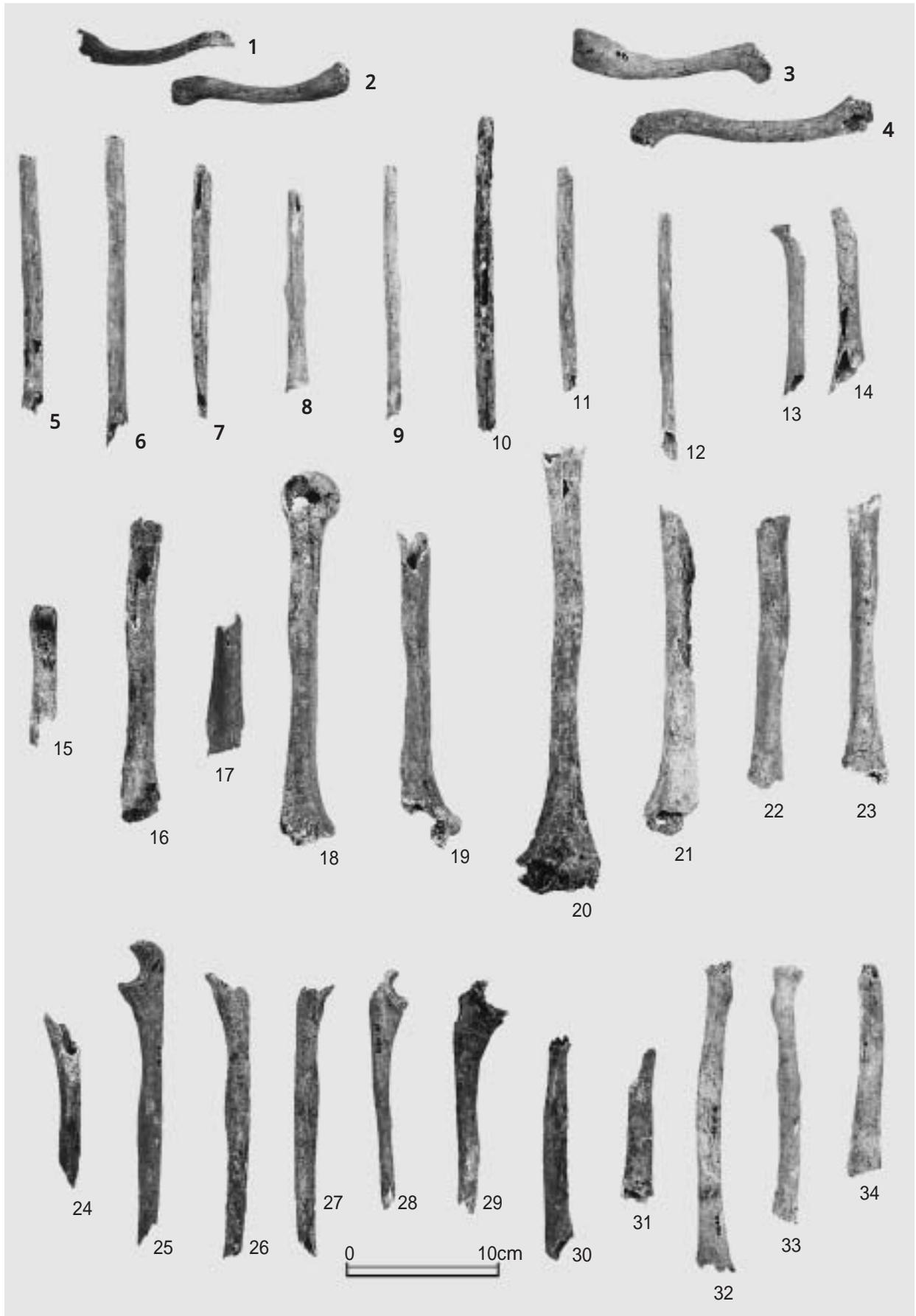
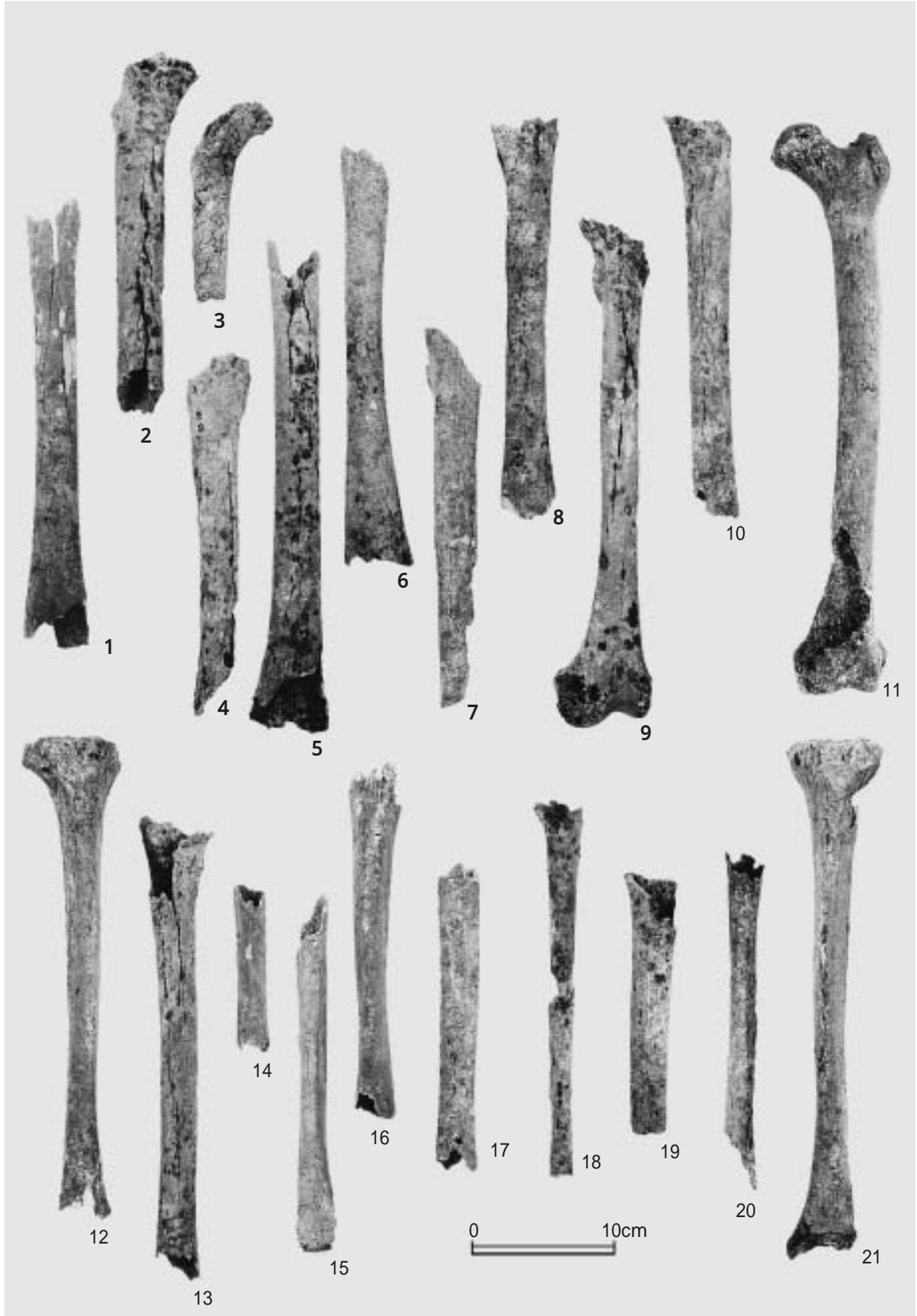


写真9 沖塚古墳出土人骨 - 2



3 逆水西遺跡（逆水遺跡 a 地点）出土人骨

（1）緒言

逆水西遺跡（逆水遺跡 a 地点）は、千葉県八千代市米本字逆水に所在する集落跡、墓跡である。平成 8 年 4 月～平成 8 年 5 月にかけて調査された。人骨が検出されたのは、中世の土坑墓からである。年代は 15 世紀～17 世紀前半のものでと推定される。人骨は、保存状態が悪く、少なくとも 1 個体分の遊離歯と僅かな骨片が数点残っているのみである。したがって、個体別に記載する事が困難であるため、骨片の部位の判定と、保存されている歯の報告をそれぞれ記載した。歯の種別については歯式を用いた。印は生前歯槽開放を表している。

人骨名については和名を用いた。なお、本文中の計測値の単位は mm である。また、数字（NO.）は取り上げ番号である。

（2）人骨所見

骨片

骨片は、3 点出土している。

6 P（ 1 ）長骨片 1 点である。骨質が非常に厚い。本骨片は小さく、ヒトの骨であるのか、動物骨の
であるか判別することが難しく、同定を保留した。また、部位の同定は不可能であった。

8 P（ 1～2 ）右側の椎骨が 1 点のみである。特に記載することはない。

8 P（ 2 ）部位不明。1 cm 程度の骨片である。特に記載することはない。

歯

出土した歯は、全て遊離歯であり、上顎の左右第 1 大臼歯部分と、下顎の切歯部分、下顎右側第 1 大臼歯部分に僅かに歯槽骨片が残っている。歯の咬耗は、大臼歯の象牙質がわずかに露出する程度である。Lovejoy(1985)の D に相当し、推定年齢は 20～24 歳である。この推定年齢は、アメリカ先住民の歯の咬耗から割り出したものである。日本における中世時代人の歯の咬耗から割り出される推定年齢は、食物の影響などから判断して、アメリカ先住民より進んでいると考えてよいであろう。また、Broca の年齢推定では 段階に相当し、壮年初期である。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6
8	7	6	5	4		2				2	3	4		

上顎歯 中切歯は左右ともシャベル型で、側切歯は左右ともに Interruption groove（斜切痕）がある。

下顎歯 左側第 1 大臼歯は 3 根である。日本人における下顎第 1 大臼歯の 3 根の出現率は、縄文時代人骨で 5 % 未満、現代人骨では約 25 % と報告されている（Turner 1997）。中世のみでの出現率は報告が無いため、詳細は不明である。

（3）小結

本遺跡出土人骨は、歯の鑑定より、壮年（性別は不明）が 1 人いたということ以外は特に報告することはない。また、下顎右側第 1 大臼歯の 3 根の出現頻度に関する研究は、中世人骨では、サンプル数が少ないため、残念ながら行われていない。今後出土資料が増えるのを待って、改めて報告の機会を持ちたいと考えている。

そして、6 P（ 1 ）の骨片は、残った部分が小さいこと、部位を同定するだけの情報がなく、人骨

ではない可能性も考えられるため、今回は鑑定を保留した。

謝辞

本報告を書くに当たり、歯の鑑定では国立科学博物館人類研究部の溝口優司先生、海部陽介先生に御指導いただきました。末筆ながら感謝いたします。

参考文献

Lovejoy, C.O 1985 Dental wear in the Libben population: Its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. *Am . J . Phys. Anthropology* , 68 : 47-56

G. Richard Scott and Christy G. Turner 1997 *The anthropology of modern human teeth.*

Dental morphology and its variation in recent human populations. Cambridge University press

(橋本裕子・馬場悠男)

III ま と め

1 八千代市域における人骨調査

八千代市域における遺跡出土の人骨については、明治時代に破壊された石棺から人骨・直刀が出土したという神野芝山1号墳の話が最も古い事例であろう。調査としては、昭和26(1951)年に早稲田大学考古学研究室が行った栗谷古墳の調査が最初と思われる(大川1953)。栗谷古墳は戦時中の開墾によって墳丘が削られ、平坦になった地表下10cmのところ箱式石棺が発見されたとのことである。石棺は既に盗掘を受けていたらしいが、直刀・鉄鏃・刀子・ガラス玉・琥珀製棗玉・白瑪瑙製勾玉等の副葬品と人骨が出土した。人骨は大腿骨と歯の状態が良好で、2体分であることがわかったという。

下って昭和46(1971)年8月、土砂採取によって台地が削られてできた崖面に、箱式石棺が露出したため緊急調査が行われた。平戸台1号墳の調査である。千葉県立八千代高等学校教諭村田一男氏(当時)を中心に同校史学会生徒等によって行われた。墳丘のみならず箱式石棺自体が破壊を受けていたので、人骨は下肢骨と歯が残っていただけであった(山岸1971, 堀部1991)。次いで昭和47(1972)年5月、本書に掲載した神野芝山2号墳の調査が行われた。昭和48(1973)年の村上遺跡群の調査では、村上1号墳の軟砂岩の横穴式石室から歯5点を含む人骨粉が出土した(千葉県都市公社1975)。

その後、昭和58(1983)年5～6月、堰場台古墳の調査で、箱式石棺の中から人骨が多量出土した(八千代市教委2002)。昭和63(1988)年9月～平成元(1989)年1月、本書に掲載した沖塚古墳の調査が行われた。平成2(1990)年9月～3(1991)年2月の真木野古墳の調査で、箱式石棺の中から人骨が出土した(八千代市教委2002)。平成6年度の財団法人千葉県文化財センターによる間見穴古墳群の調査でも、箱式石棺から人骨が出土した(千葉県文化財センター1994)。

平成11(1999)年6月～9月、平戸台2号墳の調査が行われ、やはり箱式石棺から多量の人骨が出土した。この調査の本整理を実施するに当たり、人類学の専門家に分析を委託することにした。これを契機に、それまでに蓄積されていた人骨を順次分析委託することとなったのである。

古墳時代以外の人骨としては、9世紀代と考えられるものが、昭和54(1979)年から昭和63(1988)年に行われた白幡前遺跡の調査で出土している。昭和52(1977)年に開始された、千葉県文化財センターによる萱田地区特定土地区画整理事業に先行する一連の発掘調査の一つである。1基の土坑から2頭のウマの骨とともに成人の大腿骨が左右1点ずつ1体分出土した(松井1991)。

中世と考えられるものとしては、本書掲載の逆水遺跡a地点の事例と、平成13年度に調査された作山遺跡の事例がある。

近世のものとしては、平成2(1990)年10月～平成4(1992)年9月に調査された殿内遺跡、平成9(1997)年4月～7月に調査された赤作遺跡(千葉県文化財センター1999)、平成13(2001)年6月～9月に調査された浅間内遺跡(第5次本調査)がある(八千代市教委2003)。赤作遺跡では12基の土坑墓から少なくとも16体の人骨が確認され、近世人骨の好資料を提供している(梶ヶ山1999)。浅間内の事例は、17世紀後半の墓坑と考えられる。

2 古墳時代人骨の調査成果

八千代市域における古墳出土人骨の事例をまとめると、第5表のとおりである。平戸台1号・2号・堰場台・真木野・神野芝山2号・栗谷各古墳は、箱式石棺が盛行した古墳時代後期、6世紀後半～7世紀

前半頃の事例，沖塚古墳は古墳時代終末の7世紀後半の事例，村上1号墳は同じく7世紀末～8世紀初頭の事例と考えられる。

2年間をかけて，平戸台2号・堰場台・真木野・神野芝山2号・沖塚の5例について人骨分析を行い，以下の各点を得た。人骨分析を行った事例については，いずれも追葬の結果，男女及び未成年をも含んだ10体前後の人々が埋葬されていたことが判明した。これらの人骨の形態は，いずれも古墳時代人骨の特徴の範囲内であった。しかしその範囲内でいくつかの形態的特徴が指摘された。平戸台2号墳では，鼻根部が偏平で際立って狭い個体群と，鼻根部が立体的で鼻骨最小幅が大きい個体群があり，二群の独立した血縁の親族が埋葬されていた可能性が指摘されている（橋本2001）。堰場台古墳では，下顎骨が「ゆりいす状」の個体群とそうでない個体群とに分かれる。また大腿骨の形態は，東日本古墳時代人の特徴の範囲内で多岐に富んでいる（橋本・馬場2002）。神野芝山2号墳では，男性4体が高身長・強壮な体格であり，なんらかの血縁関係が想定できる。沖塚古墳では，男性のうち2体は強壮な体格と推定された。平戸台2号で外傷性骨化性筋炎，神野芝山2号で関節炎，沖塚で骨膜炎などの病気が認められた。神野芝山2号では最終埋葬者に塗朱をしたらしいことが明らかとなった。

今後の課題としては，堰場台・真木野・神野芝山2号・沖塚の各古墳は，本整理・報告書作成が未了である。人骨の分析データをより一層生かすためにも，調査全体の内容を明らかにできるようにしていきたい。分析はこれですべて終了したのではなく，例えばコラーゲン分析で「何を食べていたのか」を明らかにすることや，復顔で実際の顔の表情を復元するなど，さらに一歩進んだ分析も視野に入れて行きたい。市内にはまだ現存する古墳がある。また墳丘は失われていても，埋葬主体部が地下に残っている古墳もあると予想される。人骨の出土があれば，その都度分析を実施し，データを蓄積して行きたい。

以上，八千代市域における古墳時代の埋葬について基礎的な情報を得ることができた。この情報を元に八千代市の歴史の一端が解明されて行くであろう。また，日本の古墳時代研究にも寄与するところが大きいと思われる。

第5表 八千代市における古墳出土人骨一覧表

古墳名	墳丘		埋葬施設	人骨					
	墳形	規模		成人男	成人女	不明	成人計	未成年	総数
平戸台2号墳	不明	径15mか	箱式石棺	5	4	2	11	4	15
堰場台古墳	不明	不明	箱式石棺		6	2	8	3	11
真木野古墳	円墳	径40m	箱式石棺	3	1	0	4	1	5
神野芝山2号墳	円墳	径30m	箱式石棺	4	2	0	6	2	8
沖塚古墳	円墳	径23m	横穴式石室	5		1	6	3	9
栗谷古墳	円墳か	不明	箱式石棺						2
平戸台1号墳	方墳	不明	箱式石棺	下肢骨と歯					
村上1号墳	方墳	28m × 20m	横穴式石室	歯5点，人骨粉					

参考文献

- 大川 清（1953）「千葉県印旛郡阿蘇村栗谷古墳」（『古代』11号）
 榎ヶ山真里（1999）「赤作遺跡出土人骨」（千葉県文化財センタ - 1999所収）
 栗田則久（1992）「古墳時代の終わり - 大化の改新の頃 -」（財団法人千葉県文化財センター編『房総考

古学ライブラリー 6 古墳時代(2)』

財団法人千葉県都市公社 (1975) 『八千代市村上遺跡群1974』

財団法人千葉県文化財センタ - (1991) 『八千代市白幡前遺跡 - 萱田地区埋蔵文化財調査報告書 - 』
千葉県文化財センタ - 調査報告第188集

財団法人千葉県文化財センタ - (1994) 『新川を望む古墳群 - 八千代市間見穴遺跡調査発表会 - 』
千葉県文化財センタ - 遺跡調査発表会資料

財団法人千葉県文化財センタ - (1999) 『一般国道296号道路改築事業埋蔵文化財調査報告書 1 - 八千代市赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡 - 』 千葉県文化財センタ - 調査報告書 360集

千葉県立八千代高等学校史学会 (1972) 「神野芝山二号墳発掘調査概報」(『史学報』 3号)

橋本裕子 (2001) 「平戸台2号墳出土人骨」(八千代市教育委員会2001所収)

橋本裕子・馬場悠男 (2002) 「人骨の分析」(八千代市教育委員会2002所収)

堀部昭夫 (1991) 「発掘調査の成果」(八千代市史編さん委員会1991所収)

松井 章 (1991) 「第4章 白幡前遺跡出土の動物遺存体」(千葉県文化財センタ - 1991所収)

村田一男 (1972) 「八千代市神野芝山2号墳発掘調査概要」(八千代市教育委員会 『八千代市遺跡分布調査概要』 所収)

村田一男 (1979) 「古墳を築く」(八千代市史編さん委員会1979所収)

八千代市教育委員会 (1996) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度』

八千代市教育委員会 (1997) 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』

八千代市教育委員会 (2001) 『千葉県八千代市平戸台2号墳発掘調査報告書』

八千代市教育委員会 (2002) 『千葉県八千代市市内出土人骨分析委託報告書』

八千代市教育委員会 (2003) 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』

八千代市史編さん委員会 (1979) 『八千代市の歴史』

八千代市史編さん委員会 (1991) 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』

山岸 憲 (1971) 「平戸台1号墳発掘調査概報」(『史学報』 2号)

千葉県八千代市
市内出土人骨分析委託報告書II

平成15年3月31日発行

編集・発行 八千代市教育委員会

千葉県八千代市大和田138-2

〒276-0045 TEL 047(483)1151
